

2020 年度前期 授業改善アンケート集計結果に対する意見

—社会イノベーション学部—

学部長 内田真人

《科目開設部門》が社会イノベーション学部である授業科目¹について、2020 年度前期に実施された授業改善アンケートの結果全体に対してコメントを述べる。

まず、2020 年度前期授業は COVID-19 対応で開講が 1 か月延期となり全面的に遠隔授業となった。この結果、本アンケートも授業形態の変更に合わせて、質問事項、対象科目に大幅な修正を加えたほか、アンケートの学生からの回答方法も授業中の配布から web 入力に切り替えた。このため、前年との単純な比較はできない点を予めお断りしておきたい。

本年度の特徴としては、以下の 3 点があげられる。

まず第 1 に、本年度前期授業は概ね高い評価を得ており、全体として授業は適切に実施されていたことが窺える。その理由はアンケート結果から 3 つ確認できる。

①13 の調査項目（これらの中には履修者の授業への参画や事前・事後学習の状況に関するものも含まれる）のうち約半数の 6 項目について、5 点尺度において全体の平均値が 4 点以上（「とてもそう思う」、「そう思う」の合計）と高い。

②従来の対面授業から急遽、全て遠隔授業に切り替わったが、項目 1「円滑に授業を受けることができた」（新設項目）は 4.18 点と高く、大きな混乱がなかった。

③授業全体に対する評価である項目 11「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」が 3.97 点であった。本項目は前年の 4.11 点から低下しているが、本年度の調査は例年評価が 4.3 以上と高いゼミが調査対象外となる一方、通年講義科目が加わるという対象科目の違い²が大きく影響しているとみられ、実質的には昨年と大きな変化はない、と考えられる。

第 2 に、遠隔授業の成果について、今回新たに加えた質問項目からみると、項目 2「この授業の内容を理解するために努力した」が 4.27 点、項目 3「教員は毎回の授業ごとに十分な指示を行っていた」が 4.12 点で、学生・教官とも前向きに取り組んだことが確かめられた。一方で、項目 6「授業の課題は適量であった」が 3.94 点、項目 8「教員との双方向のやりとり（質問への回答や課題の返却等）が十分にあった」が 3.68 と低かった。項目 6

¹ 社会イノベーション学部の政策イノベーション学科及び心理社会学科の学生が履修する両学科の教育課程は、社会イノベーション学部が《科目開設部門》となっている授業科目のほか、両学科の教育課程における科目区分別で、「総合教養科目」に配置される授業科目のほとんど、「学部共通科目」に配置される授業科目のほとんど、及び「一般共通科目」に配置される授業科目のすべては、《科目開設部門》が共通教育研究センター、国際センター、及びキャリアセンターのいずれかとなる授業科目で構成されている。一方、今回調査では COVID-19 の影響でゼミを対象外とした。

² 授業改善アンケートは、従来、前期では、前期の半期の授業科目について、後期には、通年及び後期の半期の授業科目について実施されたが、本年はゼミを対象外としているほか、通年科目についても途中段階でも実施した。

は授業回数が12週で15回分の講義を行ったこともあって課題が多かったことが影響したとみられる。また、項目8は遠隔では対面に比べた双方向のやり取りに限界があったことがうかがわれるが、4点以上と2点以下のばらつきが他の調査項目以上に大きいことも特徴となっており、2極化もあった。

第3に、授業科目ごとの履修者数及び出席者数が異なることから、全体として判断することは難しいが、項目12「1週間あたりのこの科目の勉強時間」の平均値は「2時間未満」が65%であった。講義時間（1時半30分）を勘案すると授業時間外の学習時間は30分未満であり、学習をさらに促していくことも必要であろう。

なお、本アンケートでは履修者各人の観点からの授業全体に対する総合的評価であるともみなすことができる項目10「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」について、他の科目との相関係数(r)も示されている。その内容を見ると、この授業全体に対する総合的評価は、授業科目により学生自身にとって興味や関心が得られたことと強く相関していることはもとより、学生がより良く受容できるように授業を適切に実施することとも比較的強く相関していることが示されている。引き続き、授業の適切な実施に向けて努力を維持していくことが望まれる。

次に、「授業で用いられた授業手法」については、「課題（レポート等）」が9割弱と昨年同期（44.3%）に比べてかなり高い。これは本年、COVID-19対応で期末試験が行われなかったことが影響している。また、授業を通じて身についた資質については、その分野の知識・学力のみならず、言語運用能力（主に英語）、論理低思考力、プレゼンテーション能力など多様な資質・能力の涵養につながっており、しかも例年に比べて水準がやや高くなっている。

さらに、授業改善アンケートの回答用紙の裏面には、3つの質問からなる自由回答記述欄が含まれており、評点法だけではわからない個々の授業科目に対する履修者からのさまざまな評価や意見等のコメントが示されている。限られた時間内において、回答用紙表面の評点法部分への回答に加え、記述を行ってくれている学生諸君には感謝したい。これらのコメントは、まず基本的には授業科目担当者本人において活用されることが期待されている。本年は遠隔授業であったが、全体を通じてZoomリアルタイム式授業ではチャットでの質疑応答や投票、ブレイクアウトルームの活用、オンデマンド式授業では見やすい資料や前日の資料アップで教育効果が上がることが確認できた。また双方向という意味では、学生の意見への回答や通信状況の確認が評価が高かった。他方で、通信状況や出席確認では教官の配慮を求める意見もあった。これから今後に向けて、好ましい点をさらに伸ばさせ、また好ましくない点について改善を図る上でたいへん参考となるものである。

最後に、本学生授業改善アンケートの延履修者数に対する延回答者数は、延べ履修者数7,523名に対し、1,714名、回答率は23%（前年同期79%）とかなり低かった。講義配布方式からweb入力が影響したとみられる。後期では告知方法で工夫をして学生の回答率の向上に努めたい。